

実践報告

参加型地域公開活動に参加した学生の学習効果 — 「看護の日に当たり健康を考える」学外実地体験に参加した学生の調査から —

森田孝子¹⁾, 千明政好¹⁾, 片貝智恵¹⁾

キーワード：公開講座、学外実地体験、社会貢献、人間関係、気づき

I. はじめに

看護は、人々を生活者の側面から健康の維持・増進、疾病の予防、健康の回復、苦痛の緩和に向けて支援することを責務としている。人の健康へのサービスを仕事とする看護を学ぶ場である看護学部では、看護する喜びを高め、必要な知識・技術・態度の養成、すなわち人間力、専門職者としての基盤をつくることが求められる。

本学部では、市民の皆さんの健康チェックと交流を行う中で、学生が健康と看護についての知識・技術、看護の心を確かなものにし、また看護学部の教職員として社会に貢献できることは何かを考えることを目指して、平成20年から、公開活動「看護の日にあたり健康を考える」を実施してきた。その結果については川名ら（2008）、片貝ら（2009）が報告した。市民公開講座に関する報告（加藤ら2008）（安田ら2008）（今川2009）（今村2009）（中村2009）は多いが学生が教員の指導を受けながら市民に対して健康チェックや指導を行うことの学生の学習効果に関する先行報告は見当たらない。本学部の学生参加型公開講座はこれまで3回実施した。

この公開活動が学生にどのような成果をもたらしているのかと、今後の課題について検討した。

II. 研究目的

1. 学生の看護技術、相談活動、関係性構築、アセスメント能力に関する、参加前後の自己評価から成果を明らかにする。
2. 昨年の第2回時調査結果との比較検討から継続実施することの意義について明らかにする。

3. 学外で実施する活動が学生に及ぼす学習への意欲や教育効果について検討する。

III. 用語の操作的定義

看護を学ぶ学生は、キャンパス内での講義や演習、臨床や地域での臨地実習での学び、日々の生活体験を通して専門職としての知識・技術・態度を学修していく。同時に学生にとって、シラバスに組み込まれていない場での実地体験は、学内や臨地実習では学べないさまざまな学びができる機会となる。①学生の実地体験については、「学生本人によって知覚される満足の主観的評価」と定義した。②公開活動は、学外の大衆が集まる場所に出向いて、一般市民に対して行う健康支援活動と定義した。

IV. 方法

1. 公開活動の概要

- 1) 開催日時と場所：毎年看護週間の始まる直前の土曜日に実施。今回も5月8日（土）11時から15時の4時間、昨年と同じI市にある大型ショッピングモール内にて実施した。当日の実施については、ポスターや広報等でアナウンスした。
- 2) 実施方法と内容：本活動は公募に応じた学生28名と教職員10名で実施した。内容は、相談コーナー（健康相談、療養相談、進路相談）、健康チェック（身長・体重測定、血圧測定、体脂肪測定、骨密度測定、アルコールパッチテスト）、体験コーナー（心肺蘇生法BLSとAED体験、自分の血流観察体験）、展示コーナー（本学・看護学部ではどのような学びをしているか）で

1) 上武大学看護学部

V. 結果

1. 参加学生への調査結果

1) 学生の参加は28名で回答は21 (有効回答21)、うち男性は3名であった。回答の内訳は1年5名で全員初参加、2年は5名で平均参加回数は1.4回、3年は8名で参加回数の平均は2回であったが、3回連続しての参加者が3名いた。4年は3名で平均参加回数は2.3回であった。

2) 参加前後の全項目に関する学生の自己評価の平均全体としてみると相談活動3項目以外のすべての

項目において向上したと認識していた (図1)。前後の平均値の差は、t検定によると表2に示すごとく、「血圧測定」「身近な対応」「結果説明」以外は有意差を認めた。「血流測定」「体脂肪測定」の技術項目「初めての人への話しかけ」「市民の皆さんへ参加を促す行動」「看護する喜び・気づき」の関係性構築に関する項目は、有意水準0.01で参加前後の自己評価得点の差は有意であった。

3) 看護技術についての自己評価結果
看護技術項目について学年別でみると、1年は

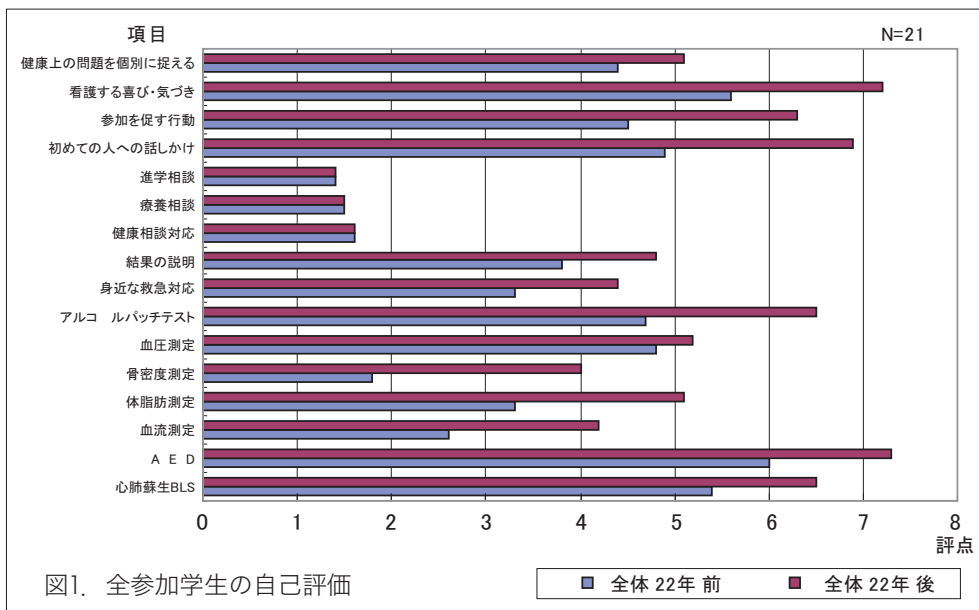


表2. 参加前、参加後の自己評価得点の平均値

看護技術	参加前平均	参加後平均	SD	有意差	N
心肺蘇生BLS	5.4	6.45	1.67	**	20
AED	5.95	7.25	1.838	**	20
血流測定	2.64	4.24	2.32	*	21
体脂肪測定	3.25	5.08	2.52	*	20
骨密度測定	1.75	4	3.53	**	20
血圧測定	4.79	5.18	0.851		19
アルコールパッチテスト	4.71	6.5	2.985	**	21
身近な救急対応	3.29	4.42	2.205		19
結果の説明	3.75	4.75	2.482		20
関係性構築					
初めての人への話しかけ	4.79	5.18	2.499	*	21
参加を促す行動	4.3	6	2.564	*	20
看護する喜び・気づき	5.65	7.53	2.52	*	20
アセスメント					
健康上の問題を個別に捉える	4.43	5.07	1.155	**	21

* 0.01 ** 0.05

BLS, AEDでは3点台から6点前後に向上した。血圧測定は、評点も低くまた、前後での変化も見られなかった。その他の技術項目は参加後に高い評価になっていた(図2)。2年では全体として1年に比べて参加前の評価得点が高く、参加後は血圧測定以外の技術に対する認識は高い数値を示した(図3)。3年では一次救命処置BLS (Basic Life Support以下BLS)、自動体外式除細動器AED (Automated External Defibrillator以下AED)、身近な救急対応技術等で参加前からある程度高い技術を持っていると回答しており、前後での変化を認めなかった。しかし、骨密度、体脂肪、血流の測定は、参加前の評価は4以下で他の技術項目に比べて低い評価であった。参加後はこれ

らに対する評価は6以上に向上し、参加前に比べて高く評価していた(図4)。4年では骨密度測定技術が平均2.0で低い評価をした以外は4.0以上の評価で、参加前後の変化は認めなかった(図5)。

4) 相談対応についての自己評価結果

進学相談、療養相談、健康相談についての項目である。1年は相談活動に参加していないため全員0の評価であった。相談対応は主に3年4年が担当しており、3年と4年では4年が有意に高い評価得点であった。相談活動についての自己評価得点は3年、4年ともに参加前後で変化はなかった(図6)。

5) 関係性構築について

この領域では、「初めての人への話しかけ」「参加

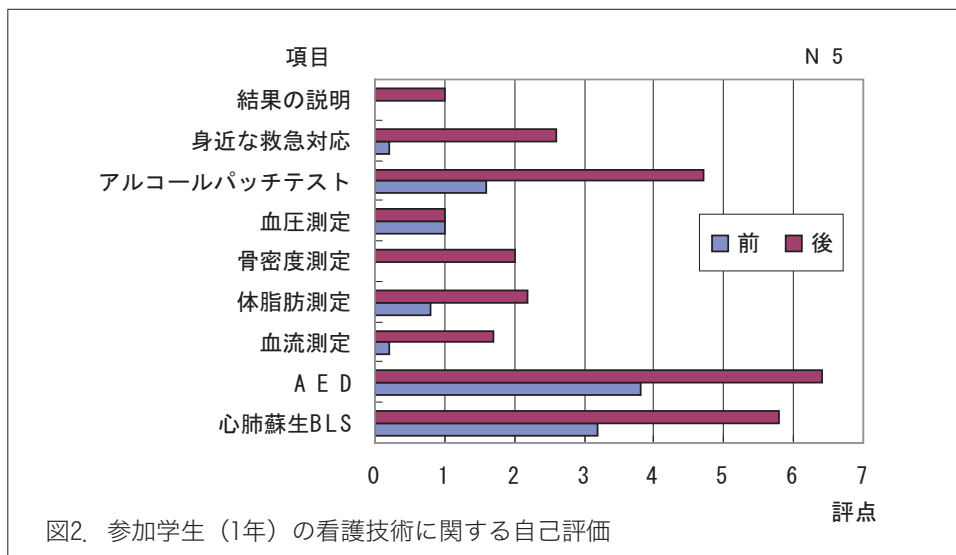


図2. 参加学生（1年）の看護技術に関する自己評価

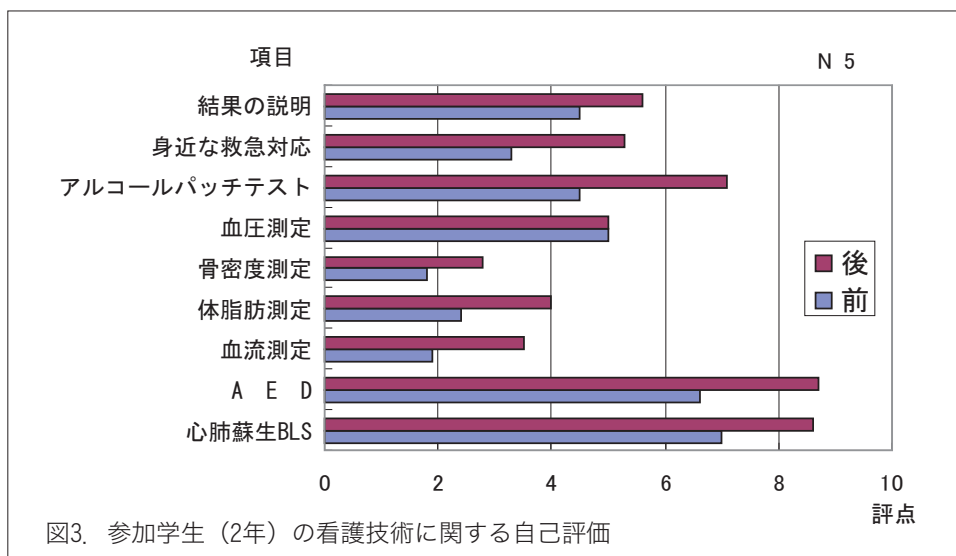


図3. 参加学生（2年）の看護技術に関する自己評価

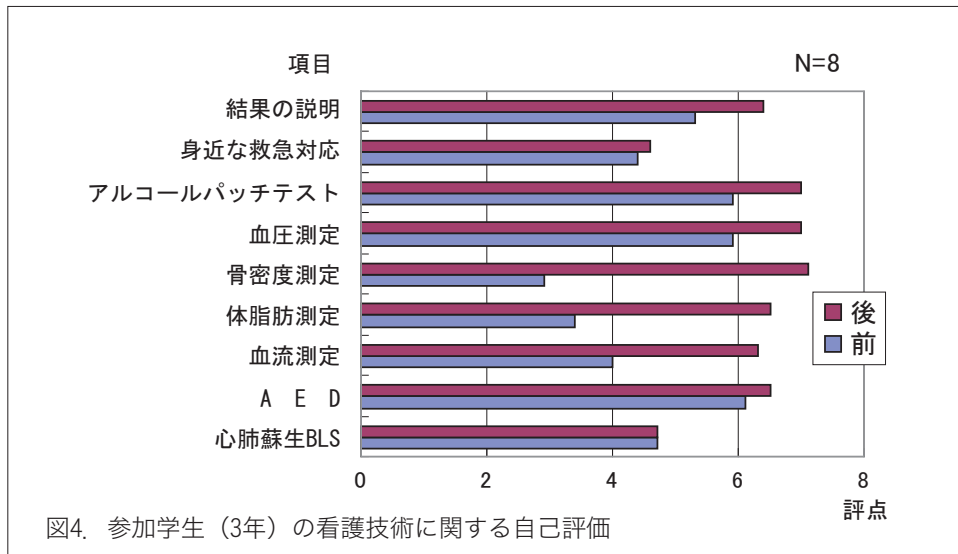


図4. 参加学生（3年）の看護技術に関する自己評価

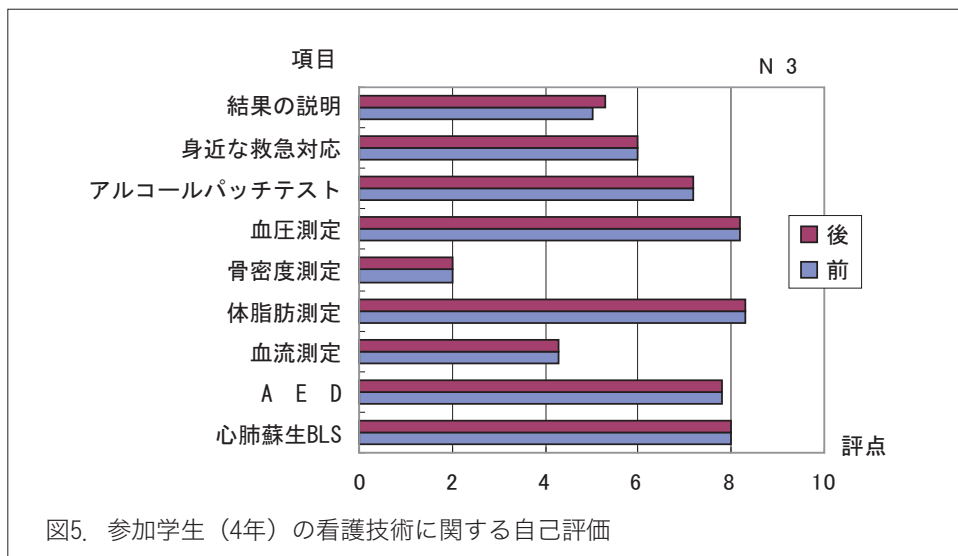


図5. 参加学生（4年）の看護技術に関する自己評価

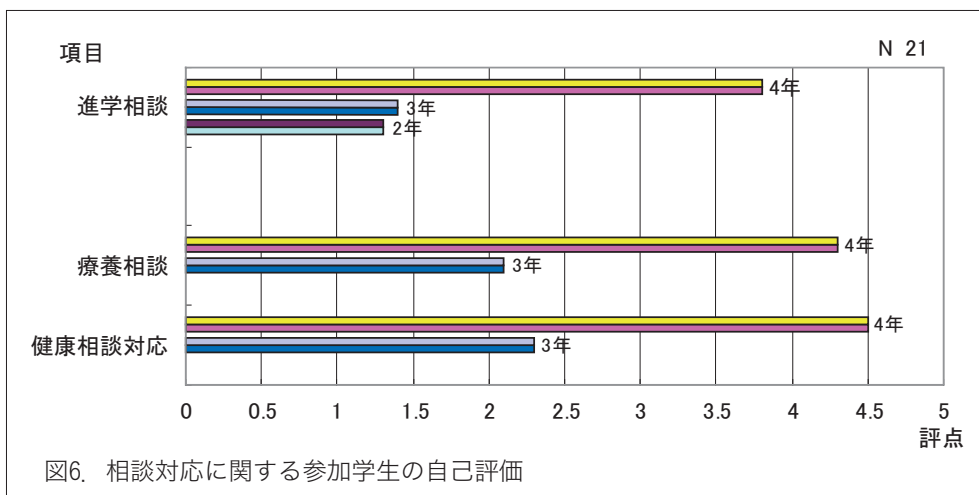


図6. 相談対応に関する参加学生の自己評価

を促す行動」「看護する喜び・気づき」について参加前後での自己評価の違いを測定した。1年では3項目共に参加後の評点は有意に変化していた。2～4年では参加前から5点以上の評価で高値を示し、参加後には評価得点は高くなっていた（図7）。

6) アセスメント能力は、質問「健康上の問題を個別に捉える」項目で回答を求めた。この項目に対する学生の自己評価は図8に示すとおり学年が高くなるにしたがって評点は高くなっていた。参加前後の平均値の有意差は全体では認められた学年別ではみとめられなかった。

7) 調査結果の前年度との比較

平成21年の看護の日に実施した同じ調査結果と

今回の比較を図9に示した。平成21年の学生参加者は本年と同じ28名で質問紙への回答は24(1年8名、2年8名、3年5名、4年3名)であった。21年の結果は、すべての項目において参加前後で有意な差はない(図9)。しかし、22年度では、血圧測定や相談対応以外の多くの項目で参加前後に差を認めた。また、21年に比べて22年は参加前、参加後ともに高い自己評価値であった。21年の参加後の評価と今回の参加前の能力評価を比較するとBLS、AED、血圧測定、アルコールパッチテスト、結果の説明等の看護技術項目で有意差を認めた。また、関係性構築3項目を21年の参加後評価と今回を比較すると有意に向上している(図9)。

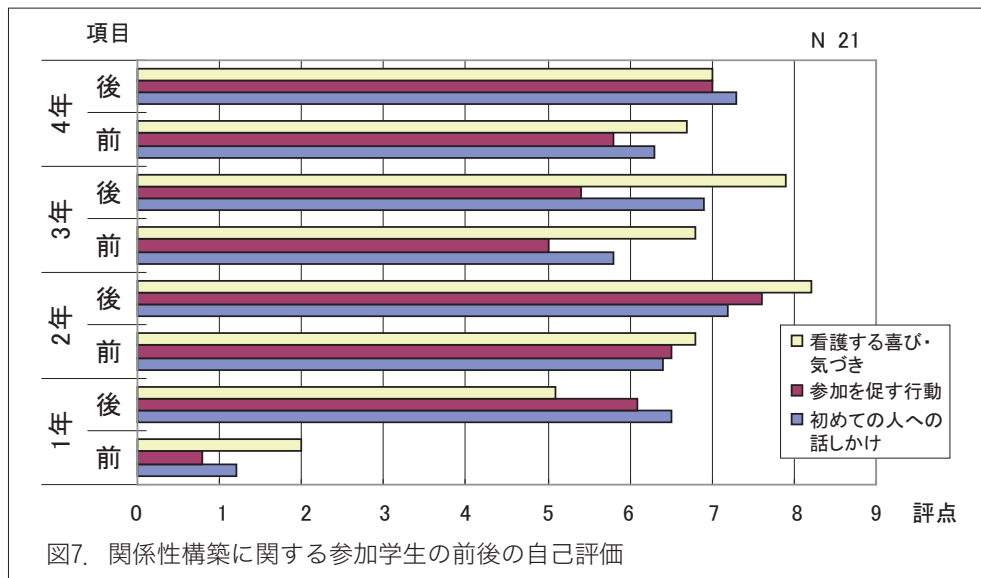


図7. 関係性構築に関する参加学生の前後の自己評価

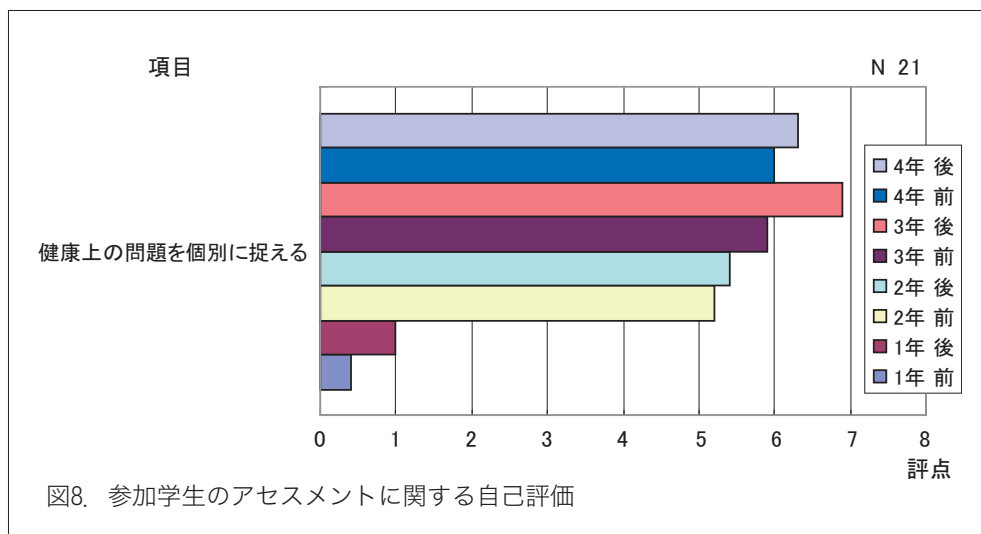
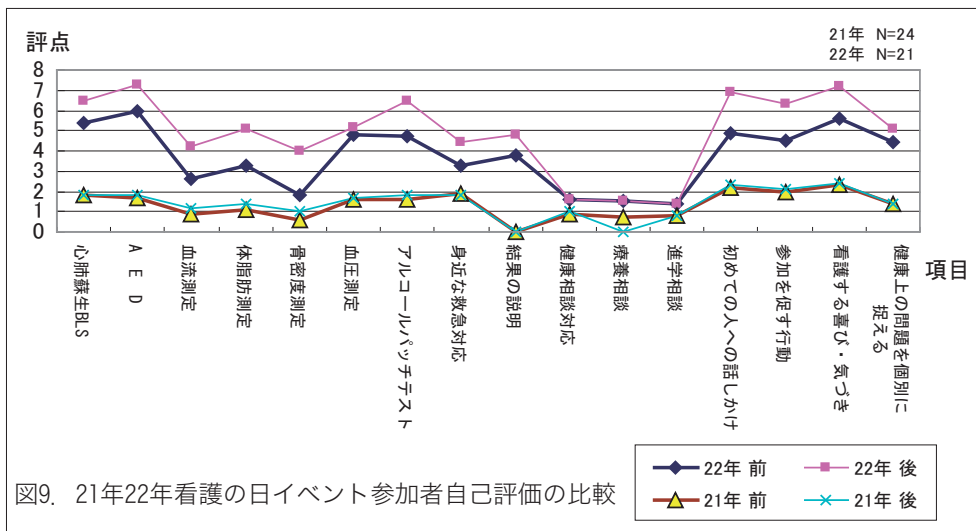


図8. 参加学生のアセスメントに関する自己評価



2. 一般参加者の調査結果

1) 一般市民の参加総数は正確に数えていないが、骨密度測定装置に記録されている測定人数は164名であった。質問紙に回答された骨密度への参加者数は37名(図11)であり、この数値からは200名以上の参加者であったと推測することができる。

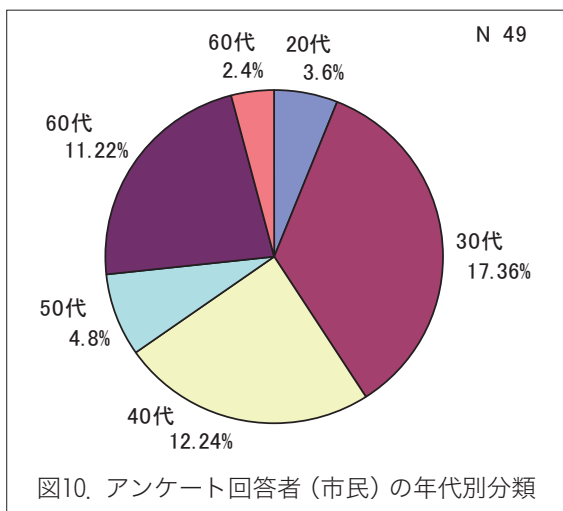
2) 一般参加者のアンケート回答総数は49名で、全参加者の22%程度と考えられた。図10は年代別数である。30歳代が最も多く、家族連れで参加した人が半数以上であった。また、このイベントは会場に来て知ったと半数以上が回答した。参加者の半数以上は近郊市町村や県外からの人々であった。

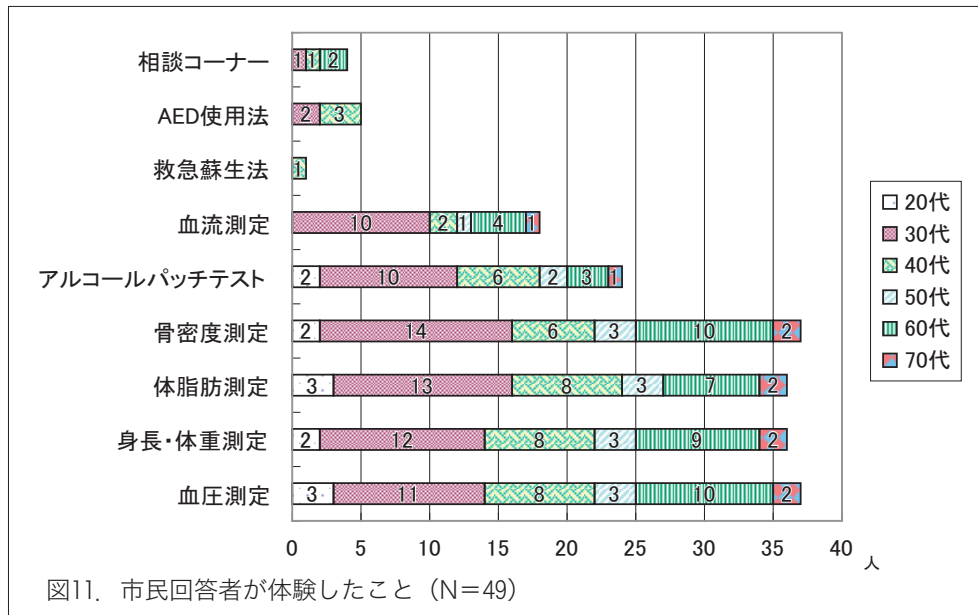
参加者が体験した項目は血圧、骨密度、身長・体重、体脂肪測定が、回答者の75%以上であった。BLS体験やAED体験は、観察した担当者は「子供づれの

家族で体験するグループや個人が途切れることなく続いた」と報告した。しかし、体験したとの回答数は1桁の数値であった。血流測定は終了時間が過ぎても人が列を作って待つ状況であったが、回答者の中では血流測定を体験した人の数は多くはなかった(図11)。

3) 参加者の感想(自由記載)

自由記載については内容分析の手法を用いて分析した。多くの記述の中から、学生の活動内容の特性、活動内容の原因、活動内容の効果に関する文脈を抽出した。抽出した文脈は46で内容の特性21.7%、内容の原因30.4%、内容の効果47.8%であった。内容の特性については、「学生が積極的に測定、説明してくれる」「普通の健康診断では測定できない骨密度・血流の測定ができた」「場所柄参加しやすい」「いろいろ話を聞いてもらえた」「参加も質問もしやすかった」「ショッピングモールの気軽に立ち寄れる場所がよい」といったことがあげられた。学生活動内容の原因に属する文脈として「血流の状態が理解できる説明」「血流測定」「骨密度測定がよい」「心マッサージの指導」「AED体験指導」「身長体重・体脂肪測定と説明」「アルコールチェック」等が代表的なものであった。学生の活動内容の効果については「学生の説明がとてもわかりやすい」「測定結果からアドバイスを丁寧にしてもらった」「気楽に質問できる」「笑顔で声を掛けられ気軽に体験できた」「説明を聞いて気持ちが楽になった」「AEDの知識が増えた」「子どもたちが楽しんで心マッサージやAEDを体験できた」「学生の笑顔の働きかけ」等であった。信頼





性の確認は前述のクレッペンドルフの α 係数を用いた。一致率平均は90.7%であった。

VI. 考察

1. 学生の看護技術提供、相談対応、関係性構築、アセスメント能力への影響について

1) 参加学生全体を通して看護技術の自己評価は、参加前後で「血圧測定、身近な救急対応、結果の説明」以外は有意に差を認めた。これを学年別に技術項目の平均値をみると学年が高くなるのと並行して参加前の自己評価は高くなっている。参加前の評価が全学年を通して低い骨密度、体脂肪、血流測定の3年では参加後の伸び率が大きい。3年生は平均2回の参加であるが3回連続して参加しているものが3人おり、これまでの参加での体験を活かして積極的にこれらの項目を担当し、学ぶ姿勢をもって参加したとも考えられる。また、学内のサークル活動の中で演習を重ねてきた他の項目と異なり、このイベントで実体験ができることへの思いが内発的動機付けになっているとも考えられる。また、学年進行と共に学修したことの内容が変わり技術や関係構築項目への関心に変化しているとも考えられる。

1年生は入学後1ヶ月余りでの参加で、AED、BLS以外は0~1.5の評価であった。この2つ以外は学内での演習も体験していない学習段階であることが参加前評価に影響していると考えられる。しかし、参加後は多くの項目で評価得点が高くなっていること

から多くの学びにつながり、次年度へのステップになるものと考えられる。学内での学習進度に並行する形で参加前の評価が出ており、参加後の評価からも学生自身は満足のいく体験であったと知覚していると考えられる。

結果の説明については、参加前後で技術向上の自己評価に差を認めなかった。しかし、一般参加者が自由記載した項目の47.8%が、看護学生が活動する内容の効果であった。また、看護する喜びについての自己評価得点も各学年共に参加後に高く評価している。これらのことから自分達で測定した結果を対象に合わせて説明できた満足がある程度知覚できていると推察される。

また、1年前の結果と今回の評価得点に大きな開きがあり、学生は昨年の結果を踏まえて1年間、自己のレディネスを育てるのに役立ててきたとも考えられる。

2) 相談対応については、

相談対応は、各種測定結果を総合的に相談される、健康について日ごろ悩んでいること、家族の進学についてなどさまざまなことでの相談に応じることになるため、今回も教員が中心に行うことが多かった。低学年はそれを見学することが主になったが高学年になると学生が主体的に相談を受け、教員の指導を受けながら対応することができていた。相談対応は、他者の話に傾聴する、内容を解釈分析し判断する力をつけることに役立つと考えられるが、結果を今後

どのように教育手法に反映させるかが課題ともいえる。

3) 関係性構築に関する3項目は、表2でも示したように学生の自己評価の平均値は参加前後で有意な変化を示し、学生は能力が向上したという満足を知覚している。看護する喜びを知覚していることがわかった。学んだことを地域の中で活用してみることによって参加した一般市民の方から「学生の笑顔がいいね。学生の説明がとても分かりやすい。丁寧な説明」といった反応が返ってくる。他者から賞賛される、受け入れられるという体験が学習への動機づけ、意欲、自信につながると考えられる。

以上のことから学生たちはこの公開活動に参加し、主体的に体験することに学外高い満足を知覚していると示唆された。自己評価であることから必ずしも技術の向上と一致するとはいえないが、学びの動機付けと意欲的態度の醸成につながっていると考える。

2. 学外実地体験を継続することの意義について

平成21年の同じ学外体験では、参加前後共に学生の自己評価は相対的に低く、参加後も有意な変化を認めたものはなかった。しかし22年の参加前は相談対応を除くすべての項目で、昨年参加後よりも高い自己評価得点であった。これは昨年の体験を踏まえて学内で演習やサークル活動を通して学びを深めてきた結果ともいえる。さらに22年の参加後では相談対応以外では評価得点が高くなっている。これは学生たちが主体的に実践できたことによる満足の知覚といえよう。特に信頼性構築に関する項目で、初めての人への話しかけや他の目的で来ている人たちへ参加を促す行動で、高い満足を知覚した結果となっている。これらは学内では学習できない項目である。また、「看護者は、対象となる人々との間に信頼関係を築き、その信頼関係に基づいて看護を提供する」(日本看護協会2003)のものである。看護の現場では、健康に問題を抱えている人たちとであったそのときから円滑な看護サービスの提供が求められる。この学外体験は人との信頼関係構築能力形成に大きな役割を果たしていると考えられる。

また、教員にとってもどのような介入をすればもっとも適切な教育的アプローチにつながるのかを、学内や臨地実習での介入とは異なる場に身をおいて考えるよい機会になる。以上のことから、多く

の市民の集まる場に出向いて健康チェックや救急蘇生についての体験を働きかけ指導することを通して学生は多くの学びを得ることができ、次の機会に備えて終了後も自己学習を啓発するなど、学外で実施する活動が学生の学習意欲や教育効果に及ぼす影響は大きく、継続していくことの意義は高いと考える。

VII. 結論

この研究は毎年実施している学生参加型学外体験公開活動が看護を学ぶ学生にどのような影響をもたらしているかを、会場で調査したアンケート調査をもとに検討した。

学生は参加することによって学内や臨地実習では体験できない新たな体験をする。新たな環境に身をおいて学内で学んできたことを活用し、人間関係を構築する過程の中で看護する喜びや看護の気づきを体得していた。初めて出会う人との話しかけや参加を促す行動は、信頼関係構築を看護提供の基盤としていることを考えるとき、この学外体験学習は学生にとってかけがえの無い学びの場になっているといえる。

学生は主体的に活動した項目に高い満足を知覚していた。看護技術9項目については参加後により高い満足を知覚していることから技術を確かなものとして習得することにつながっている。学外体験学習は学生にとって看護の喜びや気づきを得る良い機会となり、学習への動機づけ、意欲を持続するためのインセンティブにもなっている。

VIII. 本研究の限界

参加学生の母集団が少ないため統計処理の信頼性という面で課題が残る。また、この調査は本研究のために作成したのではなく、この健康を考える学外公開活動のために作成したもので、そこにひとつの限界がある。また、学生の技術や関係性構築等に関する評価は自己評価であるため、客観的な評価と異なることも予測される。

謝辞

毎年「看護の日に当たり健康を考える市民講座」に参加していただいている教職員・学生の皆さん、必要備品・物品をはじめご支援をいただいている学校法人学文館に心から感謝申し上げます。

文献

- 1) 今川孝枝：参画型学習としての学生による「看護の日」の活動での学び KJ法による感想の分析から 共創福祉4巻2号 p49-54 2009
- 2) 今村利香：ストーマ公開講座が参加者に及ぼす教育効果 日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会誌 Vol.25 No.1 p83 2009
- 3) 片貝智恵, 小西美里, 千明政好, 他：成人看護学公開講座の成果と今後の課題 上武大学看護学部紀要 Vol.5 No.1 p31-35
- 4) 加藤咲子, 片岡秀樹, 森田孝子, 他：市民地域公開講座「高齢者の介護と急変時の対応」における参加者の背景 日本クリティカルケア看護学会誌 Vol.4 No.1 p120 2008
- 5) 川名ヤヨ子, 森田孝子：看護学部の地域公開活動報告
- 6) 杉森みどり他：看護教育学 第4版 医学書院
- 7) 下山 剛：達成動機づけの教育心理学 金子書房
- 8) 中島宣行監訳：モチベーション理論の新展開 創成社
- 9) 中村広子：呼吸リハビリ公開講座のあり方の検討 日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌 19巻 p160 2009
- 10) 日本看護協会：看護者の倫理綱領 2003 第3条 日本看護協会出版会
- 11) 安田康晴, 田中秀治, 杉本勝彦：応急手当講習と防災意識に関する検討 国土舘大学体育・スポーツ科学研究 8号 p13-22 2008